

オリンピックで我が国技を！

法務委員会 専門員

ひらはら としあき
櫛原 利明

新国立競技場や五輪エンブレムが大きな社会・政治問題になっている中、東京五輪の開会まで5年を切り、諸準備は待たなしの段階に入った。多くの外国人観光客の来日に備え、法務省でも、空港の自動化ゲートのシステム改修やテロ対策強化等の「円滑かつ厳格な出入国管理体制の整備」のために、160億円余を来年度予算概算要求に計上している。

主役である競技団体は好成績を期して選手の強化に余念がないが、一方で五輪種目外の団体は、別枠の開催国提案で参加種目入りするべく必死のアピール合戦を繰り返している。本年9月末には候補種目が決まり、来年8月のIOC総会で最終決定する運びであるが、その中で、本年6月の第1次選考であえなく落選してしまったのが、国技・相撲である。

大相撲では最近外国出身力士の活躍が著しいが、アマの日本相撲連盟は、割と早い時期から五輪正式種目入りを目指し、精力的に活動してきた。国際相撲連盟の設立（1992年。現在は加盟84カ国）、世界選手権の開催（今年で男子が第20回、女子が第11回）、IOCへの加入（1998年に暫定承認団体）、非五輪種目の総合大会であるワールドゲームズ（2013年コロンビア大会では相撲は人気が高く、観客も多かった。）や格闘技の総合大会であるコンバットゲームズ（前回は2013年ロシア）への参加などである。このように相撲の国際化を目指すのは、相撲の競技人口の増大を図るためである。観戦の対象としての大相撲は人気が高いが、逆にその影響で、相撲は体の大きな一部の男子のみがやるものだ、という認識がむしろ一般的のように思われる。現に高校の相撲部の数は年々減少していて、関係者は頭を悩ませていた。そこで、「大相撲に入って横綱になる」という夢のほかにも、体が大きくなくても階級制のあるアマチュア相撲で「オリンピックに出て金メダルを取る」という夢を用意し、多くの青少年たちに相撲競技に打ち込んでもらおうというわけである。

IOC加盟に当たって男女平等種目であることが条件付けられたので（もう1点が、厳格なドーピング防止）、以後積極的に女子相撲の普及にも取り組んでいる。各地の少年相撲クラブでは女の子も元気いっぱい相撲を取り、最近では高校・大学等の女子選手がマスコミの話題になることも増えてきて、着実に成果は挙がっている。

ただ、五輪の正式種目となるにはまだまだ世界への普及も女子の競技人口も少ないのが現状である。今後も「輝を締め直して」、地道にそして積極的に普及活動を続けていく必要があるだろう。しかし、IOCが要求する大相撲力士の参加（五輪は世界最高の大会なのだから最高レベルの選手が出るべきという理由）については、大相撲とアマチュア相撲の違いを理解していないと言わざるを得ない。すなわち、アマチュア相撲は純粋な競技・スポーツであるのに対し、大相撲は「太古より五穀豊穡を祈り執り行われた神事（祭事）を起源とし、我が国固有の国技である相撲道の伝統と秩序を維持し継承発展させるために、……相撲文化の振興……」に寄与することを目的とする」（日本相撲協会定款第3条）ものであり、むしろ我が国の伝統文化の維持継承という文化的側面が強いものである。したがってスポーツの祭典である五輪の対象としては、アマチュア相撲こそがふさわしいのである。

いずれにせよ、せつかく日本で開催される五輪なのであるから、正式競技は無理としても、せめて公開競技（1996年のアトランタ五輪以降実施されていない）として参加し（ちなみに1964年東京五輪のときは、公開競技種目「武道」の一内容として、アマチュア相撲も参加した。）、相撲の魅力を広く世界にアピールしたいものである。